



ショートコメント

★★★

Data 2024-66

チャイコフスキーの妻
(Tchaikovsky's Wife)2022年/ロシア、フランス、スイス映画
配給：ミモザフィルムズ/143分

2024（令和6）年9月14日鑑賞

テアトル梅田

監督・脚本：キリル・セレブ
レンニコフ
出演：アリョーナ・ミハイロ
ワノオーディン・ラン
ド・ピロン／フィリップ
ブ・アブデーエフ／ユ
リア・アウグ

👁️👁️ みどころ

何を隠そう、私はクラシック音楽の交響曲ではチャイコフスキーの第6番『悲愴』が大好きだし、バイオリン協奏曲でもチャイコフスキーのバイオリン協奏曲（＝チャイコン）が1番好きだ。

チャイコンは、陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『北京ヴァイオリン』（02年）（『シネマ5』299頁）でもたつぷりと鳴り響いていたが、本作では、チャイコフスキーの15歳年下の恋人だったヴァイオリニストの青年コーテクとの共同による“チャイコン誕生秘話”もタツプりと・・・？そう思っていたが、否！143分の本作は、タイトル通りのチャイコフスキーの妻（＝アントニーナ）のストーリーぶりに徹しているから、アレレ、アレレ・・・。

今でこそ同性愛は市民権を得て堂々と公表されているが、19世紀のロシアではそれはタブー。ところが、ロシアが誇る作曲家チャイコフスキーは同性愛者で有名だったというからビックリ！『インフル病みのペトロフ家』（21年）（『シネマ51』131頁）で有名なロシア人監督で、現在はドイツに亡命中のキリル・セレブレニコフが、なぜかそんなテーマに興味を持ち、本作の脚本と監督を！本作はフランスで異例の大ヒットらしいが、その賛否は？

◆何を隠そう、私は、チャイコフスキーの音楽が大好きだ。交響曲なら第6番『悲愴』が大好きだが、何と言っても素晴らしいのは彼のバイオリン協奏曲（＝チャイコン）だ。私たち団塊世代では、クラシック音楽に興味を持ち、ステレオに興味を持ち、LPレコードを買う場合、1枚目が『運命』と『新世界』のカップリング、2枚目がメンデルスゾーンのパイオリン協奏曲とチャイコフスキーのバイオリン協奏曲のカップリングだった。ちなみに、ピアノ協奏曲はベートーベンの第5番『皇帝』が最も有名だが、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番は最初だけやたらカッコいいものの、その後は全然ダメ（？）だから、あまりお勧めできない。また、彼には『1812年』という“交響詩”があるが、これはトルス

トイの『戦争と平和』(1869 年)で有名なナポレオン戦争(ナポレオンによるロシア侵略戦争)をテーマにした興味深い曲で、終盤には大砲の音が鳴り響くので、それにも注目!

他方、チャイコフスキーのバイオリン協奏曲(いわゆる、チャイコン)は、私の大好きな陳凱歌(チェン・カイコー)監督の『北京ヴァイオリン』(02 年)『シネマ 5』299 頁)では全編を通じて鳴り響いていた。したがって、『チャイコフスキーの妻』と題された本作でも、チャイコンを始めとする私の大好きなチャイコフスキーの音楽がテンコ盛り!そう思っていたが、事前情報ではどうもそうではなさそうだから、アレレ、アレレ・・・?すると、本作のテーマは?

◆一般的に世界の「三大美女」といえば、クレオパトラ、楊貴妃、小野小町だが、「世界三大悪女」といえば、マリー・アントワネット、西太后、そしてモーツァルトの妻であるコンスタンツェ。また「日本の三大悪女」は北条政子、日野富子、淀殿だ。他方、「世界の三大悪妻」といえば、ソクラテスの妻・クサンティッペと、モーツァルトの妻・コンスタンツェと、トロストイの妻・ソフィアだし、「クラシック音楽界の歴史に残る三大悪妻」といえば、ハイドンの妻・マリア、モーツァルトの妻・コンスタンツェ、チャイコフスキーの妻・アントニーナだ。このように、チャイコフスキーの妻・アントニーナは天下の悪妻として有名だが、それは一体なぜ?

本作は『インフル病みのペトロフ家』(21 年)『シネマ 51』131 頁)という、何とも風変わりな映画の脚本を書き、監督をしたロシア生まれのキリル・セレブレンニコフ監督が『Tchaikovsky: The Quest for the Inner Man』と『アントニーナ・チャイコフスカヤ、忘れ去られた人生の物語』という 2 冊の著書に興味を持ったことによって生まれたものだろうだが、なぜキリル・セレブレンニコフ監督はその著書に興味を持ったの?

◆本作の最大のポイントは、偉大な作曲家チャイコフスキー(オーディン・ランド・ピロン)が同性愛者だったというものだ。女性を愛することのできないチャイコフスキーとアントニーナ(アリョーナ・ミハイロワ)との結婚はわずか数ヶ月で破綻したが、その原因は、アントニーナが「天下の悪妻」だったためではなく、チャイコフスキーのセクシュアリティにあったことを、キリル・セレブレンニコフ監督は本作で描きたかったわけだ。しかし、そんなことをすればプーチン大統領の独裁色が強まっている現在のロシアでは、かなりヤバイのでは・・・?

資料を調べたところでは、アントニーナからの熱烈な求愛を受けて、「兄と妹のような関係でいられるなら・・・」との条件付きで(?)結婚を承諾した彼は、アントニーナとの結婚以前に、モスクワ音楽院の教え子で 15 歳も年下のヴァイオリニストの青年コーテク(ニキータ・エレネフ)との熱い恋があったらしい。そしてチャイコンが誕生したのは、チャイコフスキーとアントニーナとの結婚が破綻した後、あるきっかけでコーテクとの再

会を果たし、男同士の愛情が芽生えていく中で生まれたそうだ。そんな情報を事前に得ていた私は、本作にもそんな“チャイコン誕生秘話”が登場し、『北京ヴァイオリン』と同じようにチャイコンが鳴り響くものと思っていたが・・・。

◆今の社会では“ストーカー”という言葉が定着し、「ストーカー規制法」なる法律まで生まれている。しかし、冒頭のチャイコフスキーの葬儀が終わった後の本作の展開は、最後までアントニーナのチャイコフスキーに対するストーカー行為で貫徹されているから、それに注目！私は、なぜチャイコフスキーがそんなアントニーナのストーカー的本性を見抜けず、「兄と妹のような関係でいられるなら・・・」という中断半端な条件で結婚を承諾したのかよくわからない。また、いつからアントニーナと結婚したことへの後悔が始まったのかもよくわからないが、これは明らかにチャイコフスキーの判断ミスだ。

近代民法、近代家族法が成立した今でも、離婚は一方が断固拒否すればかなり難しいが、本作で勉強になるのは、19世紀のロシアでもアントニーナが拒否する以上、離婚は極めて難しかったということだ。もっとも、今年弁護士50周年を迎える私は多数の離婚事件を処理してきたが、妻が「絶対離婚しない」との主張を貫いた結果、最高裁判所の判決までいき、同判決で夫からの離婚請求が棄却されたケースはわずか1件だけだ。つまり、100のうち99は「私は離婚しない！」と口では言っても、実はそれは慰謝料や財産分与の額を引き上げるための方便として使われているということだ。しかし、チャイコフスキーの妻・アントニーナの場合は・・・？

◆“鬼才”と称されるキリル・セレブレンニコフ監督特有の演出手法は、本作でも際立っている。とりわけ本作では、タイトルとされた『チャイコフスキーの妻』の内心（＝チャイコフスキーへの絶対的な愛）をいかにスクリーン上で表現するかがポイントになるから、その演出が注目される。本作前半に見る、アントニーナのチャイコフスキーへの愛のぶつけ方はストレートで熱烈だが、それなりに理解できる。セクシュアリティとして女性に興味のないチャイコフスキーをして、「兄と妹のような関係なら・・・」とまで譲歩させたのだから、その熱烈な愛情表現と結婚へのアプローチはある意味立派なものだ。しかし、1人でサンクトペテルブルクに赴き、アントニーナとの面会を一切遮断するチャイコフスキーに対するアントニーナのストーカー的な迫り方は如何なもの？

本作ではそこから少しずつ精神異常をきたしていくアントニーナの内心の表現の仕方に注目！そこになぜ5人もの裸の男が登場して乱舞するの？また彼女にはなぜ内縁の夫で弁護士のシュリコフ（ウラジーミル・ミシュコフ）がおり、彼との間になぜ3人もの子供が生まれているの？そこら辺りの演出があまりにもキリル・セレブレンニコフ監督流すぎるから、それが好きな人にはいいのだろうが、残念ながら私にはイマイチ・・・。

2024（令和6）年9月20日記